

---

# 魔導書の門番

大田功介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導書の門番

### 【Nコード】

N5354Y

### 【作者名】

大田功介

### 【あらすじ】

主人公ミレリア・ハートンはある事件に巻き込まれる。その時、彼女はある男に会う。その男にある決断迫られる。それは、彼女の運命変える決断だった。

## はじまりの出来事？（前書き）

よろしく願います

小説は初めて書くものです

## はじまりの出来事？

彼女は戸惑った。ついさつきまで、みんなが盛り上がった体育祭が戦場になったからだ。

楽しかった生徒の笑い声は、悲鳴や奇声に変わり、教職員はそれを止めることなく自分たちもこの戦争に参加していた。

そう、今この体育祭は生徒や教職員らの殴りあいが変わってしまったのだ。理由は彼女も分らなかった。

ただ、分ることは、ここは彼女の知る体育祭ではないことだけだった。校庭には返り血が飛び散り、

教職員のテントも倒れてしまった。すでに何人かの生徒は気を失ったり、倒れたりしていた。

「こんなのどうして・・・みんなしっかりしてよ」彼女は泣きながらみんなに叫んだ。しかしみんなの奇声や悲鳴の声で彼女の言葉は届かなかった。そもそもこのような彼らの狂気の前で例え彼女の声が聞こえたとしても、彼らの心に届くかはかなり難しかった。彼女の訴えも意味なく、殴り合いはさらに激しくなった。またひとり、またひとりとどんどん倒れていった。その中に見覚えある女の子がいた。茶髪の彼女にいつも隣についてくる姉妹のように仲良かったレニユちゃん！

彼女は急に顔を青ざめてレニユちゃんに駆け寄った。「レニユちゃんしっかりして、どうしたのレニユちゃん」彼女は必死でレニユちゃんの体を揺する。しかし冷たくなった彼女の体に触れたとき、彼女の顔が歪んだ。初めての人の死、初めての友達の死、手を握ると温かいぬくもりは冷たく変わってしまった。

きれいなピンクの髪の毛はさばさになり、目には生気がなかった。彼女は友達の死が衝撃過ぎたのか、校庭で吐いた。そして自分もこの汚物のように、吐きだされたいと神様に願った。しかしその願いも生徒たちの狂気や奇声でかき消された。彼女はもう半ばこの状態

を收拾をあきらめたとき、一人の冷たい男が立っていた。

はじまりの出来事？（後書き）

いろいろと文章的におかしいところがあったら教えてください  
後、感想とかも書いてくださると幸いです

## はじめりの出来事？（前書き）

二作目です

かなりごり押しです

誤字、脱字など見つけたら教えていただけると幸いです

## はじまりの出来事？

そのとき、一人の男が彼女の前に立っていた。その男の黒いコートを着ていて、学校の関係者ではないの是一目了然だった。また、教師のように温厚なイメージはなく、むしろ殺人者や暗殺者ような刃物よつな寒気を彼女は感じた。男はこの戦場のような体育祭を前に少しも気にせず、彼女のほうに歩いてきた。男の暗くするどい目は彼女に向けられた。その時、彼女は、直感的にこの男が体育祭を戦場変えたと感じた。またこの男をここで始末しなければならぬと悟った。彼女は近く落ちてあつた。金属バット拾い、男に大きく振りかぶつた。しかし、男は金属バット避けず、片手で受け止めた。まるで、何事もなかつたように、「とても興味ぶかい。この結界の中にいながらこの結界の干渉を受けてない・・・君は一体何者だ？」暗く低い声で、彼女に男は問いた。彼女は、憎悪の目を男に向けて、「あなたこそ誰よ！こんな楽しい行事を戦場に替えて、何がしたいのよ！」涙を流しながら彼女は男に訴えた。男は、少し困つた顔をして「それは誤解だ。私はここに結界なんか張つてはない」彼女に言つた。「なら、誰がこんなひどい事をしたの？」「魔術師だよ。」「魔術師？」彼女は現実味のない答えに聞き返してしまつた。男はそれが面白かつたらしく苦笑して「そう、魔術師。理から外れた悪魔の叡智を司るものだよ。」「なるほど、魔術師なら結界とかも張れるね」彼女もさつきよりは、冷静さを取り戻してたのでこの男の話をだいぶ理解することができた。彼女はさつきよつな憎しみはなかつたが目で男を睨みつけながら「単刀直入で聞くよ。あなたも魔術師なの」男は無表情で「そうだ。魔術師だ。」と彼女に言つた。彼女はまた男に「あなたは本当に学校に結界を張つてないのね？」同じことを尋ねた。「有無、この結界は作りがいいが秘匿が甘い。私ならもつと完璧な結界を作る自信はある」無表情で男はつぶやいた。もともと結界とは、現実を魔の術で仕切り、異界を作り

あげる。異界に入ったものはその世界の住人ならなければならない。例えば、この結界は狂化と生贄で構成されている。なのでこの校庭にいる生徒は、狂いながら力尽きるのは、そのためである。「なら、あなたはここに・・・何しに来たの？」彼女のその問いを男が待っていたように冷酷に笑いながら「悪い魔術師を懲らしめに来たんだよ。」男は校庭の中央に刺さっている。青い杭を引き抜いた。その瞬間に生徒たちの悲鳴や奇声がなくなった。「終わったの？」彼女は不安そうに男に尋ねた。男は首を横に振りながら「まだだ・・・私は柱の一本を抜いただけだ。今から敵の本拠地に行く。君も来るか？」彼女は戸惑った。もともと自分はこの男を信用してない。その男とともに行動するのはかなり危険だろう。しかし、彼女は自分の親友を殺した犯人の顔が見たかった。そしてなんか一言言いたかった。「敵の本拠地に行けば結界は完璧に壊れるの?」「左様、それは私が保証する」男の顔は、嘘をついているようには見えなかった。「なら、私も行くよ」学校では見せたことのないような真剣な顔で男につぶやいた。男は彼女の顔を見て笑みを作り「よろしい。我名は、サオ・クロミア」と彼女の前で言い、軽く会釈した。彼女も会釈を返し「ミレリア・ハートンだよ。・・・ミレリアでいいから」とミレリアはサオに自己紹介をした。「承知した。行くぞミレリア」男は後ろにいるミレリアにそう叫ぶと一人で歩いていった。ミレリアもサオを見失わないように後を追いかけた。

## はじまりの出来事？（後書き）

今日からテストがほぼ一週間前です。  
それでも書けたら書いてゆくつもりです

## はじまりの出来事？（前書き）

テスト無理でした。

でも、小説は最後まで書きます

今回もかなりごり押しです。いつもすいません。

## はじまりの出来事？

しばらくサオについていく校舎を出て、学校の裏庭による古い建物に着いた。「ミレリア　ここはなんだ？」

サオは唐突にミレリアに尋ねた。「え……ここは旧校舎だよ」このクロスト高校には、旧校舎と新校舎の二つの建物がある。サオは旧校舎を一通り見て回ると勝ち誇った笑みを浮かべて「やはりこの結界を敷いた魔術師は秘匿性が甘い」サオは彼の言っていることがよく分らなかつたみたいで「秘匿性？」とサオに聞き返した。「そう、秘匿性だよ。私たちの魔術は悪魔の叡智を行使する、本来なら理から外れた魔術を秘匿しなければならない。」そしてまた勝ち誇った笑みを浮かべ「また秘匿性が無いとほかの魔術師に気づかれるかもしれないからな」そう言うと、サオは旧校舎の扉を乱暴に開けた。さつきまで威圧感のあった扉は甲高い音を上げて開いた。開けた瞬間にとても不気味な感じがミレリアを襲った。蛇に睨まれたような彼女が寒気で体を震わせていた。サオはそれが面白かつたらしく「怖いのか？　ミレリア」からかうように言った。ミレリアは顔を赤くして「別に怖いわけじゃないんだから！　急に寒気しただけだから」言い返した。サオは苦笑いをしながら「冗談だよ。ここは敵の工房だ、常人なら怖がるのが当たり前だよ」「ならここは、敵の本拠地なの？」尋ねると、「有無、魔術痕跡的にもここが敵の工房だろう」「ここから、いろんなトラップがあるかもしれない。絶対私から離れるな！？」さつきみたい笑ってなく真剣な顔をして言った。その気迫負けたらしく「ハイ」とびっくりしたように言った。ミレリアはサオがこんな事を言うとは意外に思った。あんな冷酷な人なのに私のこと心配してくれてる、本当は……この人……とミレリア思った時、「伏せる！？」サオは叫び、ミレリアを黒いコート抱きしめるように隠した。ミレリアは顔を赤くして「え……ええ」狼狽していると、サオは「静かにしろ！」「ミレリアの口を手で塞いだ。口を

塞がれたミレリアは訳を分らずサオをほうを見た。サオはいつもの冷酷な声で「敵の使い魔だ」小さい声ミレリアの耳元で言った。最初は何を言っているかよく分らなかつたが回りを見渡すと慎重2メートル位の二足歩行をする竜がすぐ1メートル位まで来ていることに気付いた。あまりにも突然で非常識な事が起こつたので、ミレリアはまた声を出そうとしたが、すんでのところでまたサオに口を塞がれた。ミレリアは小さい声で「あれ、何……トカゲ……それともイモリ」あまりにも非常識な出来事が起こつたのでアホみたいなのを言つと、「あれは翼竜だ！」サオは冷静にミレリアに言った。翼竜、ドラゴンの仲間を使い魔のランクは最高クラスである。しかしドラゴンの仲間の中では知能は低く、ふつ々のドラゴンみたい会話能力はなく、さらにとても凶暴なのでふつう戦うとまず返り討ちある。しかしサオは、そんな凶暴な使い魔相手にも、冷静に対応していた。敵はこちらに近づいているが気付いてない。敵は目で視覚でこちらを捉えてないのだ。なら嗅覚 いやならそれも最初からこちらに気づくはずだ。なら残されたのは聴覚の一つだけであつた。幸い聴覚ならこちら音を立てなければいいだけの話である。ミレリアに「敵の使い魔は、音でこちらを認識している慎重に行くぞ」囁いた。ミレリアもそれに肯定したらしく小さく頷いた。しばらく旧校舎散策していると、ついに敵の本拠地に着いた。「ここで、本当に正しいの？」ミレリアは不安そうに聞いた。「うむ、ここだけ今までより、強く魔力を感じる。大方ここで間違いはないだろう」しかし、今までよりも魔力強さが異常である。最初は畏だと思つたが、今までの人払いの結界や校舎に張つた結界みたいな雑な結界を作るものである。畏を心配はないと、確信すると「ミレリア 行くぞ」ドアを開けた。部屋には、たくさん楽器や肖像画が飾つてあつた。「ここは、どうやら音楽室みたいだね」ミレリアは回りの楽器などをみて呟いた。その時、「!？」 強い魔力の気配を感じた。一人の男が立っていた。男は二人を見下しながら「お前らか、私の儀式を邪魔した不届きものは！」不愉快そうに言った。「じゃあ、あな

たが私たちの学校に結界を敷いたんですか？ クロルア先生！」ミレリアは信じられないという顔で男を見ていた。男はそんなミレリアの顔を笑いながら「そうだよ、ハートン君 私だよ」この男はクロルア・マクス、金髪でとても暗い顔をいつもしている人で、いつも校長にペコペコしていたのでミレリアは小物だと勝手に決めつけていたので、こんな事を起こすなんて思っていなかった。「クロルア……あのマクス家の一族か？」マクスは魔術の一族の中でもかなり名門である。「先生なんで、こんなひどい事を」いまだに信じられないという顔でクロルアを見た。

しかし、クロルアにとってミレリアはどうでもいい存在なので無視した。問題なのは……あのミレリアの隣にいる黒いコートの男だ。自分の結界を破壊し、また工房の設置した使い魔に見つからずここまで来た。あれは、一流の魔術師だ。「貴様、何者か」と尋ねた「私は、サオ・クロミアだ。」サオはクロルアに言った。サオ……協会でも指名手配されてる魔術師でそんな男がいたはず……クロルアは小さく笑みを浮かべた。この結界を破壊した男はもちろん始末するさらにこの男の体に刻んである。魔術回路を協会に提出することで協会とのパイプも作れる。これなら一石二鳥だ。ならさっそく「貴様、人の儀式をぶち壊した以上それなり覚悟はできてるんだろっな！？」クロルアは指揮者のような素振りです手を挙げると急に音楽室の楽器が鳴り響いた。「さあ、貴様にささげる狂想曲だ。」カプリチオ「クロルアは笑い声というんな楽器音が不協和音を起こしてた。

## はじまりの出来事？（後書き）

また、書きますので読んでください。  
感想をいただけるとありがたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5354y/>

---

魔導書の門番

2011年12月18日00時50分発行